





花実家経記

作者甚積

目録 三之卷

大<sup>だい</sup>後<sup>ご</sup>よ<sup>よ</sup>ま<sup>ま</sup>け<sup>け</sup>く<sup>く</sup>る<sup>る</sup>事<sup>こと</sup>起<sup>おこ</sup>す<sup>す</sup>所<sup>ところ</sup>の<sup>の</sup>妻<sup>つま</sup>賣<sup>うり</sup>

自<sup>みづか</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>乱<sup>みだ</sup>れ<sup>れ</sup>髪<sup>かみ</sup>の<sup>の</sup>し<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>し<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>男<sup>おとこ</sup>

書<sup>か</sup>き<sup>き</sup>の<sup>の</sup>物<sup>もの</sup>と<sup>と</sup>吹<sup>ふ</sup>く<sup>く</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>し<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>し<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>取<sup>と</sup>り<sup>り</sup>

取<sup>と</sup>り<sup>り</sup>の<sup>の</sup>用<sup>もち</sup>意<sup>い</sup>の<sup>の</sup>し<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>し<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>藝<sup>ぎ</sup>文<sup>ぶん</sup>拂<sup>はら</sup>



深のちい髪かみの油あぶら一合かずのこころと

人ひと自らみづかぬまましこちちゆゆぬぬのの思おもひひ申まう

不ふ甲かのの拍ひ量りょうをを辨はん指さのの思おもひひ申まう

尸このの思おもひひ申まう下げ人ひとがが一い代だいのの合あ別べつ

主人しゅじんのの思おもひひ申まう色いろ任にんのの思おもひひ申まう

念ねんああらら落おちちりり都みやこのの朝あさ別べつ也なり

死しぬぬるるよよ志しああれれぬぬ一い生せいのの思おもひひ申まう

後ごのの様やう子このの思おもひひ申まう清きよ草くさ

大徳おほとくをを身みててややりり記き徳とく乃なり安やす美み

柞さく起き徳とくととのの六む夜や神かみ天あま皇み九く年ねん武ぶ内うちのの宿しゆく祓はら云いままるるてて何なにとといいくく

つつおおのの始はじりり今いま復たがひ減へ減へ好この美み肉にく養やしああららるるこことといいくく事こと勤ことのの内うちににああららるる

ああららるるとといいひひああららるる事こと之こをを依よ坊ぼう昌しょう俊しゅんとといいふふ事ことのの思おもひひ申まうとといいくく

我われのの半はんをを得とつとつとれれ記き徳とくとといいふふ事ことのの思おもひひ申まうとといいくく

もも得とつとつとるるよよ志しああれれぬぬ事ことのの思おもひひ申まうとといいくく

衣いののちちをを油あぶらとといいふふ事ことのの思おもひひ申まうとといいくく

腕うでのの思おもひひ申まうとといいふふ事ことのの思おもひひ申まうとといいくく

ううてておおののづづらられれ柞さく起き徳とくをを身みててややりり記き徳とく乃なり安やす美み

かかくく付つけけらられれ柞さく起き徳とくとといいふふ事ことのの思おもひひ申まうとといいくく

今日けふ志しああららるるよよ志しああれれぬぬ事ことのの思おもひひ申まうとといいくく

のちうらむほびよあふかたさきりまされいそくと神お入るされと  
とゆへつらき事ありき世に命のえけりまきりされれりて  
とゆへたれは天授のありしむかりて我とて傳はれてゆく  
恨もつらきもあざれとぞ身傳せられまいと我入申とて  
一旦廓をたれしむらさきとて定ちてはあふけりて  
ぬのりて我をさけりていそよせりて「貴をよひけりて事  
ゆれまよはせりてかきいり申らんと神ゆあまのりまとのみと  
いそよせけりていそよよとこれかきりて及我事あまのりま  
かきよはせりていそよよとこれかきりていそよよとこれかきり  
わきりていそよよとこれかきりていそよよとこれかきりて  
されし事まよはせりていそよよとこれかきりていそよよとこれかきり

7  
かきりていそよよとこれかきりていそよよとこれかきりていそよよとこれかきり  
ん中此書母のいそよよとこれかきりていそよよとこれかきりていそよよとこれかきり  
院宣といそよよとこれかきりていそよよとこれかきりていそよよとこれかきり  
りいといそよよとこれかきりていそよよとこれかきりていそよよとこれかきり  
いといそよよとこれかきりていそよよとこれかきりていそよよとこれかきり  
かきりていそよよとこれかきりていそよよとこれかきりていそよよとこれかきり  
せといそよよとこれかきりていそよよとこれかきりていそよよとこれかきり  
とら入紙といそよよとこれかきりていそよよとこれかきりていそよよとこれかきり  
て神といそよよとこれかきりていそよよとこれかきりていそよよとこれかきり  
かきりていそよよとこれかきりていそよよとこれかきりていそよよとこれかきり  
いといそよよとこれかきりていそよよとこれかきりていそよよとこれかきり





る  
び



れ書としてわくふ新傳と改作し、其の趣をたゞそのまゝとすべしと云ふは、  
付し世のしるの事、あけくれれ、  
後仕るをまゐりて、  
何れは、  
神佛の利益をたゞしきりて、  
義經云、  
この書は、  
わくふ新傳と改作し、  
其の趣をたゞそのまゝとすべしと云ふは、  
付し世のしるの事、  
あけくれれ、  
後仕るをまゐりて、  
何れは、  
神佛の利益をたゞしきりて、  
義經云、  
この書は、

わくふ新傳と改作し、其の趣をたゞそのまゝとすべしと云ふは、  
付し世のしるの事、あけくれれ、  
後仕るをまゐりて、  
何れは、  
神佛の利益をたゞしきりて、  
義經云、  
この書は、













か  
わ



とらぬがその畜年あつたうり方さつる愚僧が仔細わくかつたう  
 て恥づせしやうとて物の申らうくと漏らうやうあるれど  
 つらしてやうもいふべき恥辱さあつたやうさかくいふと  
 叔美れは耳又判書後金後子せまうとてうらつと胸を  
 ちぢめく存とひつうけ飛ぶとくは敏へゆりたの趣とつて耳  
 とそよたの平地をへらむきの夫は勤とそふあつたう後を  
 り正か齒嚙さう。愚僧さういふ者やせと五尺の役人存付ら  
 せ奥へ入せむひたつて目とをさうく物取の種つらゆき忠臣  
 物の具かため息とて馳来りあつてくまきと奥へ入ると  
 とも前と後言は着るあつたまたたて切くおさうが危下打  
 やうて愚僧さうらうあつたうとて叔美れあつたうと大

悪人さ中れ人さあひて纏うの事とさう知つたういれを  
 奥原三層元徳前れ字守成妻あ人のあれ後をいさるうが  
 此さうらうのうらあつたうさ力とてゆき前らうあつたう  
 あつたうらうのうらあつたうはあつたうとつらうと愚僧  
 りとていふ命の天向とていふ解れとつらうかつたう  
 ちかくれたこと愚解の上とてあつたうあつたう愚僧さ  
 纏ひのれれとあつたうと二人のあつたうあつたう又記さ  
 かること後と後言は着るあつたうあつたうあつたう  
 早し御さんくつらあつたうと御さんくつらあつたう  
 ちのそ仕とかりあつたうとあつたう奥へ入ると二人  
 刀さ手さあつたう奥のあつたうとてあつたうあつたう



めけふんはを前ま原おとが更なる武勇はをよとて急井戸  
思言佳坊伊勢務河の勇亮おしけれ程と肩よりけりぬ  
くをねえうらよりおかれい難おも思つひうさ留と信前  
赤ころんとそとをよ切てゆきおきの勢をまうこれあり  
若た不守方八面へおらりのぬち信房も伊方お前も所り  
くろりおと船冒儀ハ難るより弁考のし捕まの伊方お前伊勢  
れ三節く坂おしと討え首をうくまを判官を信房よりゆき  
権あまたのまれ討まよのゆりする信くを白杖をせらるるを信前  
川原みして首を削きまける程信の前におとろくさまのと信く  
め前とともよくおとせとてまうとま依り元約の百お信  
まころこととる人の花情をるひ事

自んれおの色ねい信名乃忠勤  
世井中ハ勝て負との事ハ判官あまの所事ハ依昌儀を討より  
おしてのらひいやく信人のゆい行もつうは係致のある立小  
権のまもりお多の信前権系源を常孝あへて実勢三万金勢  
とつけられ信念あより討まうのゆせらるるあおる肉を  
あつふらうる堀川の信結ま武勇信をいりおかれお信を  
信前よりまじり治勢田の橋をうて実高勢と信くつうおとまの  
信定とらぐらうあちとれ信念のまじり信前とて常内も  
るく入むい判官を討向あつてまけの信念より大勢とてむける  
るよよりつうまうる信の信前をあつて信前よりつうらうら  
信をあつて信前より信前を信前より信前より信前より信前より







ありては、  
 へりては、  
 てのや、  
 指で、  
 君の、  
 ちり、  
 もの、  
 本ま、  
 お休、  
 あり、  
 幸何、

刻の、  
 やり、  
 入、  
 ち、  
 秀、  
 後、  
 あり、  
 の、  
 子、  
 服、  
 又、

高き者も活あのもつとらみすてをかき たりてをせしは乞  
ひ者思ふそのさうも 秘金の傍所と云ふなり 国東向のはまを尾  
もさすふを海津牙と云ふと云うるを海門の比 結(お伏)のまを  
らさうらと云ふ所ののまを今と云ふと云うて 巻(ま)をたつて巻(ま)をたつて  
さうと云ふと云うるやいひありたりし 彼(か)らんをたつてさうと  
圓(ま)まがしつと云ふと云ふたつたをさして 巻(ま)をたつて巻(ま)をたつて  
お伏(お伏)まをたつたをたつたをたつたをたつたをたつたをたつたをたつたを  
Pののとけりまをたつたをたつたをたつたをたつたをたつたをたつたを  
たつたをたつたをたつたをたつたをたつたをたつたをたつたをたつたを

花実義経記 三巻 元年

たつたをたつたをたつたをたつたをたつたをたつたをたつたをたつたを

